

謡と現代音楽の出会い

現代音楽作曲家 ヴィラ九条山招聘アーティスト
馬場 法子

知覚し得る全てを音に、時間軸に乗せ得る全てを音楽に、これは私が考える「音楽」の定義であり、すなわち私の作曲に対するスタンスである。何らかの人の聴覚に与える刺激をすべて音と捉えるならば、その音が雑音と呼ばれるものであれなんであれ、その刺激を用いて人為的に時間軸の上に構成して乗せる事は全て音楽であると思うからである。今回は、謡と二人の奏者の為に書いた自作「共命之鳥」を例に、どのような音素材を用いたかを追う。西洋音楽の視点から見ても最も独特だと思われる奏法（西洋音楽に於ける声の使われ方にはない、聴覚的に最も異なる特徴を持つもの）、剛吟で用いられる「浮き」を多用した事、また声のみならず、謡い手のジェスチャーも音を作り出す素材として取り入れ、謡い手に「声」「手」「足」の3つの点から音楽を作ってもらった事を、実際に楽譜を追いながら説明する。また謡からテンポのゆらぎを排除しリズムを与える為に、謡本とは異なる記譜法を用いた事、横書きの楽譜の有用性についても話す。